

Shusuke Tanaka

田中秀介展



絵をぐる

大阪市立自然史博物館

“Painted” Natural History Museum

「絵をくぐる」、あるいは美術という「術」を借りてみる

青木加苗（和歌山県立近代美術館）

巨大な牙を伸ばした化け物のようなマンモスが、骸骨となった仲間を引き連れながら迫り来る。中央には妙に実体感のある不気味な骨の塊が鎮座し、さらに手前では小さな子どもが、その大きさを確かめるように両手を広げて見上げている。それが生きていたのははるか昔、という認識すらまだ持たない幼子が、目の前にある得体の知れない物体と対峙することで、彼の周りに少しずつ「世界」をかたち作ろうとしている瞬間だ。その画面には、不思議なものに触れた彼自身の驚きに満ちたまなざしと、その様子を見つめる画家の視線とが交錯する。

高さ2メートルを超える大作《古今台頭摩擦》は、2020年に和歌山県立近代美術館で開催したシリーズ展「なつやすみの美術館10:あまたの先日ひしめいて今日」に出品された。訊けばそれは、大阪市立自然史博物館の展示室での様子だという。この頃の田中さんの制作は、日常のなかに紛れ込んだちょっとした違和感を、描く作業を通じて増幅させるようになっていた。以前は、自分のなかから何かをひっぱりだそうと、言いかえれば「表現」を探しているように私の目には映っていたのだが、数年の間に田中さんは大きく飛躍して、自分の身体と感覚をアンブレにする術を得たのだな、と私は思った。

ところでこの展覧会枠では毎年、学校教員たちとともに、来館者に鑑賞の手がかりとしてもらうためのワークシートを作成している。この作品を設問に加えたことも手伝って、会期中には描かれた少年と同じように、作品の前で手を広げる子どもたちを何人も見かけることになった。彼らは自然史博物館を訪れてはいないが、

間接的に体験しているようにも見え、しかしそれは実際の展示から得られる体験とも同質ではなかった。その違いについて考えてみたのだが、田中さんの作品が見るものに与えるのは自然科学への驚きではなく、それに対するまなざしの見つけ方ではなかるか。そう、ちょうど画中の少年が無意識に手を広げて「世界」を測ろうとしたように。そして美術が美術という枠を越え、あるいは学校教育の「美術」に根強い(自己)表現という目的を越えて、私たち誰もが世界と関係して生きていくために必須の術であり、だからこそ学校教育に美術という科目があるのだとしたら、その存在意義はまなざす「術」の獲得にこそあるのだと、私はこの作品を通して改めて確信したのだった。翻って今回の展示にあたっては、田中さんは1年あまりをかけて、ご近所博物館の展示室というひとつの閉じた世界のなかを見つめ、歩き、測り続けた。これだけ長い時間をかけて同じ場所を見つめることは、田中さんにとっても初めてのことであったろう。ここに並んだ200号12枚9点には、費やした時間によって深まった田中さんの体験が蓄積されている。と同時に、対象を見れば見るほどうつろってしまうような画家の視線の揺らぎが、誰しもの展示室での体験の断片と重ねられる。それは決して博物館が提供する文字情報には表れないが、私たちが得ている博物館体験であるだろう。つまり田中さんが描くのは自然史博物館の展示物のようにあって展示物ではなく、展示を通じた体験を内包した博物館そのものであり、それが「絵をくぐる大阪市立自然史博物館」という本展のタイトルの示すところである。

自然科学、あるいは自然史博物館というフィールドは、人間が自然という対象を合理的に見つめることで成立する。しかしそれは世界を測る「術」のひとつに過ぎない(し、実は本当に正しいとも限らない)。合理的に整

理されるなかでこぼれ落ちてしまったことを拾い上げるためには、「じっと見る／何度も見る／疑ってみる／迷ってみる」しかない。それは美術という術が抛って立つ方法だ。田中さんのように絵として描き出すところまではできなくとも、この術を通して試みることは誰しにもできる。美術というレンズを通して世界を認識することで見えてくる、新たな世界はまだまだあるはずだ。

さて田中さんが最初にこの展示室を描いてから約3年、彼にとって世界を測る術はどう変わったのだろうか。私は本展のメインイメージにもなった《一端の星》に着目している。実際には人の頭ほどの大きさの岩石を、高さ2.5メートルの大きさにまで引き伸ばし、自らを埋没させるようにして画面に向かい続けた結果、田中さんのなかから溢れ出てきた星空のような情景が克明に描き出されている。イメージを意図的に増幅させるというよりも、いわば田中さんが「絵をくぐった」ような、まなざした対象と画家の身体とが一体になったかのような感覚。それは田中さんが新たに獲得した術として、また新しい世界を見せてくれる予感に満ちている。



田中秀介《古今台頭摩擦》2019
和歌山県立近代美術館蔵



一端のせめぎ合い 2022 油彩、キャンバス 259 x 194 cm

[展示解説] ステゴサウルスから、新生代の展示

手前に描かれているのは、ステゴサウルスの尻尾です。ステゴサウルスは中生代ジュラ紀に生きていた植物食の恐竜で、全長9メートルありました。尻尾は背骨があつまってできていて、振るとしなやかに、体のよこまで曲げることが、できたと考えられています。背中から尻尾にかけて、三角形の板が並んでいます。板の側面の溝は血管のあとで、放熱板として使われていたと考えられています。ステゴサウルスの奥には、ヤベオオツノジカ、マチカネワニそして氷河時代の展示がみえます。(Y.T.)

一つのものを目で追うと、違うものが目に入る。解るように示されたものが幾重に重なり合い、それが何であったか解らなくなる。そもそも私は何も知らなかった。知る以前、知る以後、その間であたふたする。

威勢よく生きたいものだが、中々上手くいかないことも多く、威勢を保つのは難しい。彼は威勢が良い。しかし、たまたま。それで良い時もある。私も疲れたら、せえらいもんの前に立ってうわべだけでも威勢を保とう。



威勢守 2022 油彩、キャンバス 259 x 194 cm

[展示解説] ザトウクジラの前肢、それからカツオクジラ

中央の大きなものが肩の骨、肩甲骨で、大阪市中央区からみつかったおよそ2000~5000年前のザトウクジラです。ザトウクジラは体長の1/3にもなる巨大なウデを持っています。イルカもクジラも尾ビレをつけて泳ぎますがザトウクジラはウデも使って泳ぐ珍しいクジラです。作品中の人物の左肩のあたりにある化石は、大阪市の今里で見つかった、世界初にして唯一のカツオクジラの化石で貴重な標本です。手前のケースには、縄文時代の貝類が並んでいます。(Y.T.)



取り持っただけ 2022 油彩、キャンバス 259 x 194 cm

[展示解説] コウガゾウのウラガワ

これはキバだけで3メートルもある大きなコウガゾウの頭で、体全体の長さは7メートルあったでしょう。他のゾウのキバと違って、滑り台のように前下方にまっすぐ伸びています。展示を後ろからみると、特注の白いフレームがピッタリと下アゴと頭に固定されていることがわかります。絵の左側は正面からみたトリケラトプスで、左右につぶれて化石になりました。名前の由来になった3本(トリ)のツノ(ケラス)が描かれています。(Y.T.)

支える方は、支持するものの形に寄り添い、補完する。支持するものが無くなっても、その形を保ちながら自立し続けるだろう。

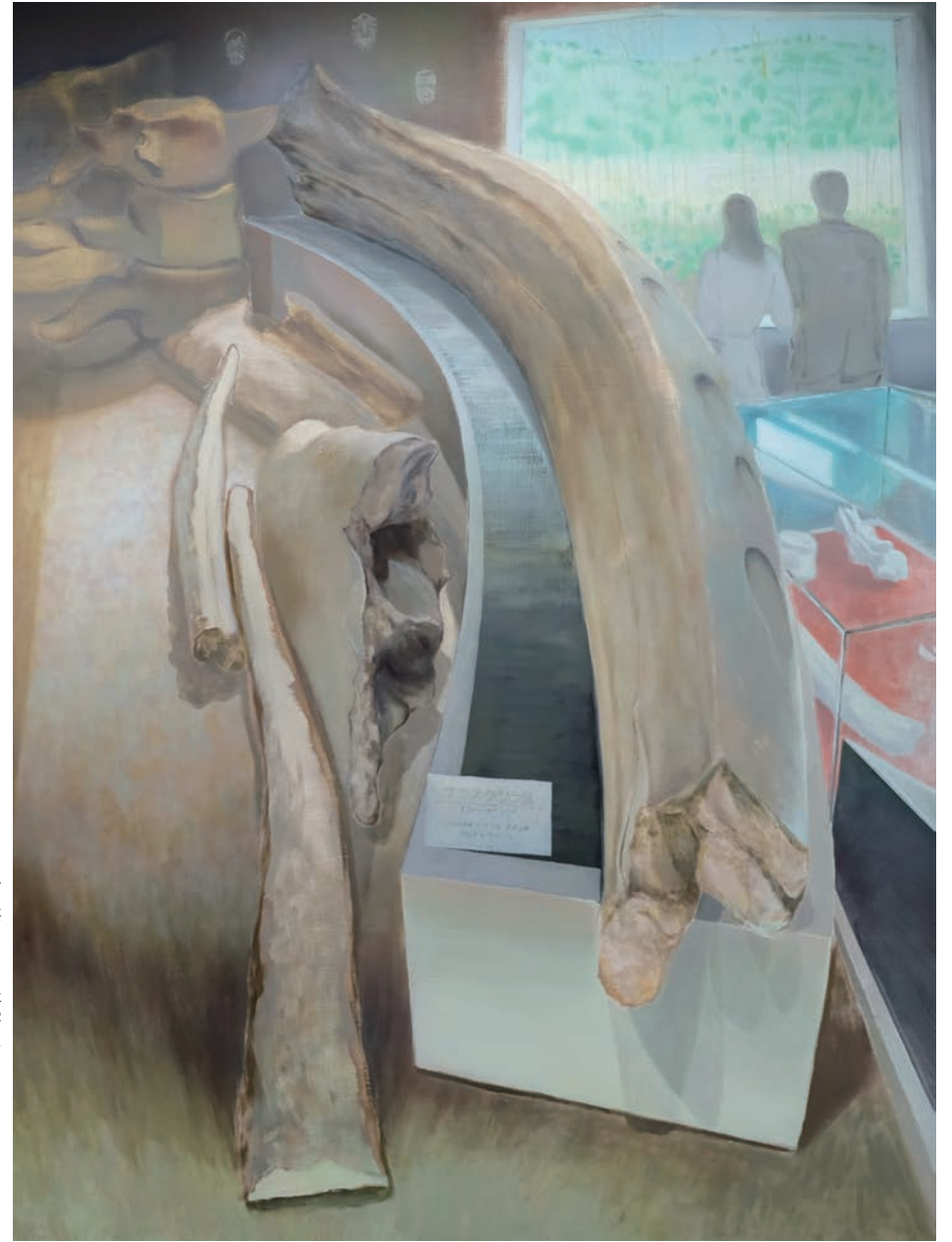
私が住むここは星で、と見渡すもの全てが星の一端。
この石も同じく星の一端を担うが、その中にさらに星を見出す。ともすると夜空は石の表面。



一端の星 2022 油彩、キャンバス 259 x 194 cm

[展示解説] 溶結凝灰岩

大阪と奈良にまたがる二上山周辺では、およそ千五百万年前に繰り返しおこった火山活動でできた火山岩や火山灰が固まってできた凝灰岩が分布しています。描かれたのは、一部が切り取られ磨かれた溶結凝灰岩と呼ばれる岩石です。溶結凝灰岩は火砕流が固まってできたものです。触れる展示になっています。断面には軽石や岩片、様々な鉱物が混じり合っている様子がみえます。(Y.T.)



二人の渚 2022 油彩、キャンバス 259 x 194 cm

[展示解説] ナガスクジラの左下アゴ

大阪市の城東区の地下4~5メートルの深さからみつかった、縄文時代の巨大なナガスクジラの下アゴで、長さは4.4メートルもあります。上にあいている穴は、神経がでていた穴で、このクジラも「生きていた」ことを思わせます。左奥に積み上げた背骨も、同じく縄文時代のクジラです。当時の大阪平野には、生駒山のふもとまで河内湾という海が入り込んでいて、クジラ以外にも貝など海の生き物の化石が見つかります。(Y.T.)

仲睦まじい二人、見ていて和む。博物館デートですか。良いじゃないですか。
この後何か良いものを食べに行ったりするんですか。ああ、私ももっと和みたい。その固い骨群を懸命に渚と見立て、二人を見続ける。

私、結構色んなものに記してきたのですが、化石には未だ記した事がない。化石だろうと当然インクは乗るが、記して良いよと言われても躊躇する。思い切って晩飯に必要な具材などを記して、化石片手にスーパーに向きたい。



筆記体 2022 油彩、キャンバス 259 × 194 cm

[展示解説] 埋もれているイルカの背骨

1954年に発見された古い標本で、縄文時代の地層である難波累層という地層から母岩ごと収集されました。イルカの背骨も母岩に少し包まれています。よくみると母岩には貝殻やウニの破片も含まれていて、当時の海を想像させてくれます。イルカの背骨のうえに、黒墨で産地情報として「梅田」と書かれています。朱墨のQ4822は大阪市立自然史博物館の標本番号です。背骨は前後に薄いので、高速で長距離を泳げるタイプのイルカの背骨でしょう。(Y.T.)



やぐら 2022 油彩、キャンバス 259 × 194 cm

[展示解説] アケボノゾウの体

アケボノゾウは200万～100万年前に北海道などをのぞく日本列島にすんでいた、肩の高さまで2メートルない小型のゾウです。これは当館の学芸員だった樽野博幸氏が明石海岸や三重県で見つけた化石を参考に組立てた、世界初のアケボノゾウの骨格復元です。化石は通常、バラバラになって、そうとう破損しますが、この標本はかなりそろって見つかった貴重なものです。肩の骨(肩甲骨)が黒いのは、化石が見つかっていないので発泡ポリスチレンで作ったためです。(Y.T.)

身を収められそうな空間があれば、そらくぐりたくなる。この展示室はその様な空間まみれである。しかし、そんなことをしてはいけない。一つお気に入りの入り口の入り口を描いて、思いどまらる。

仰々しく天井に映し出された影。影があればその実体が気になる。影の出自を探すがよくわからない。そうしている間に手前のツノが気になる。いや、ツノが先に気になっていた筈だ。もう、どちらでも良い。



セリ出す風様と廻り所 2022 油彩、キャンバス 259 × 388 cm

〔展示解説〕 ケナガマンモス

日本では北海道にすんでいたゾウの仲間、日本では2万年前に絶滅しました。長いキバは第二切歯、つまり前歯です。キバは骨ではなく、象牙質なのでツ

ルツルしており、展示でも質感の違いを表現しています。キバの間にある大きな穴は、昔は一目巨人キュプロクスの「目」などと思われていたこともありますが、実際には鼻の孔です。右上の天井には、ヤベオオツノジカの特徴的なツノがカゲとして見えます。（Y.T.）

化石が形成され、人がそれを発見し、あらゆる知恵と技術を駆使し、現在の様に展示されている。積み重なった途方もない時間の先に私は立ち会っている。私は恐らく化石にはならないが、化石は引き続き化石としてこれからもあり続けて欲しい。



これまでをこれからの果てへ 2022 油彩、キャンバス 259 × 582 cm

[展示解説] 新生代のほ乳類とマチカネワニ

左からアケボノゾウ、コウガゾウ、奥がアメリカンmastドン、手前の二足立ちがオオナマケモノ、ヤベオオツノジカ、一番右がナウマンゾウ、そして一番手前がマチカネワニです。恐竜の時代である中生代が終わったあとの「新生代」を代表する人気古生物のコーナーです。ゾウが多いのは、当館の学芸員だった樽野学芸員の専門が反映しているのだと思います。学芸員の専門性や特色が、展示に反映されていくことで、標本には付加価値がつくので、より生き生きとした展示になるのでしょう。（Y.T.）

絵をつかさどる客人

田中秀介（画家）

寝て、起きて、彷徨います。その彷徨いの内容は人それぞれとなってくるが、私は絵を描くこと、それにまつわることに多くを費やしている。何を描いているのかと問われると、あらゆる気になる物事を描いている。気になる物事を描くことは、私にとってそれとより距離を縮める行為であり、なんとかその物事を腑に落とそうと日々、躍起になっている。

あうあうと適当な事を喚きながら、誰も覗かない密やかな石、人の髪型茄子の艶、雲のゆくえと泥のねばり、などと暮らしゆく中でかち合い、描いている。すなわち私の暮らしぶりが描き出されているとも取れる。

私には子供がいる。子ができると、それまでの生活圏は改変され、子供いる様生活圏となる。その圏内に深く入ってきたのが、大阪市立自然史博物館であった。結果《古今台頭摩擦》という化石と子が対峙した絵を描くこととなる。当初、博物館内を描く事に躊躇はあったが、暮らしゆく中でかち合って気になってしまったなら、描く他なかった。

その絵は滋賀のギャラリーで初展示を行い、次に和歌山県立近代美術館で展示されることとなる。その展示情報を佐久間さんがご覧になられ「もし、博物館内に絵があるとどの様な見え方をするのか」の様な旨を眩かれ、青木さんとやりとりが始まり、私はそれを目撃し、翌日青木さんに「あの眩きを見ました」と高ぶったまま伝え「では、連絡します」と青木

さんが動いてくださり、事が起こる2020年夏。

あれよあれよと事は進んだり、進まなかったり、紆余曲折ありながらも描きだせる段階まで到達した2021年冬。

さあ、筋肉が剥ける様なキャンパス作りも終え、いざ描き出すのよ！と息巻くも、何を描いて良いのかわかりません。壁と見まごう真っ白なキャンバス群に囲まれて、気が遠くなることに少し慣れた頃、今一度、大阪市立自然史博物館を腑に落とすため、現地に幾度と通います。

描きだし、途中絵の内容に詰まれば現地へ確認に向く。これをひたすら繰り返す。かなりの回数出向いたが、今まで飽きは来なかった。飽きが来ないというよりも、この大きな絵をいくつも描けている事実が何よりもありがたく、飽きる理由は無かった。

そして、やがて絵は無事に、これまで何事も無かったかの様に展示された2022年秋。

2020年、展示の下見の段階で、青木さんと博物館を訪れた際に思い描いた展示内容と少しばかり違うが、この展示から私が受けたい印象は再現され、更にそれを上回っていた。

今回の展示に向け、私は自然史博物館の一般客である、ということをお忘れず、常にその意識を保ってきた。ここへ訪れた客の私が、たまたま絵が好きであっただけだと思ふ。今回の展示はそんな私の、いつも投げかけてくる自然史博物館への応答である。

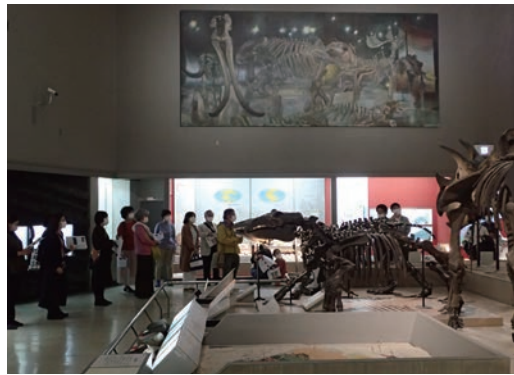
いつもよく行くこの場所が、普段を超えた状況になることを、一般客である私が一番見たかったんだと思う。





相关信息





自然史博物館の展示室で 作品と対峙してみること

佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

アートとサイエンスは表裏一体だ。古来、美しく描かれた西洋の植物の記載図、日本の繊細な図鑑の彩色図、科学絵本の緻密な昆虫の姿、想像力を刺激する太古の復元想像図。これらは「モノ」を見る科学者と芸術家の格闘の成果だ。監修する研究者が捉えた生き物の形、特徴をいかに絵として表現するか。図鑑や論文などの場合には科学者が主となり画家がその求めに応じて修正する。もちろん美術作品は、科学のために描かれるものばかりではない。同じバラを描いても解剖学的な図解にも、芸術作品にもなる。それは二つに分かれると言うよりは画家の意図と目線によってたくさんのバリエーションがあり得る。中間、というより画家それぞれの軸方向にとんがっているということだろうか。科学は学術的に定められた共通言語で発見を共有し、議論を起こす。アートは見る者の混乱や、さりげない違和感で鑑賞者に語りかけるのかもしれない。

博物館の展示物につけられた解説には、学芸員による自然界への理解に向けた「意図」がある。科学的な事実であることは間違いないのだが、たくさんの事実から何を取り上げたら親しみやすいのか、それをどのような角度から眺めたらわかりやすいか、という配慮の元に取捨選択して展示は構成されている。同じ花の造りを語るのでも、

蜜に集まる昆虫との関係で語ると、遺伝子から萼や花びらがどのように発達するのか、構成するパーツでグループをどう見分けるのかを語るのでは、それぞれアプローチが違う。どこから興味を持って他の見方を知り、多面的に理解出来るのがもっともよいのだが、つけられる解説には限界がある。かえって邪魔になることも多いだろう。

それでも、博物館には、「モノ」があることで、そうした多面的な理解を諦めないですむ。実際にモノと照らし合わせながら読む解説文は、視線の誘導であると同時に、視線は自然とほんとはそうだろうかと思いをめぐらしている。同行者と一緒に眺めることで意見のずれも生まれやすくなり、多面的な理解のきっかけになる。博物館をより楽しむための鍵は、対話による多面的な理解にあるのだと思う。学校の教科書などでの学習では難しい「協同的学習」であり、「対話型鑑賞」やVisual Thinking Strategyにつながる、眺めるモノがそこにある博物館ならではの学習だ。

さて、そうした博物館の展示室に、皆さんの視線を揺さぶる田中秀介さんの作品が展示された。しかも、描かれたモノと同じ空間に展示している。「なにが答え合わせみたいでいやだな」とおもしろいところだが、作品は堂々と「これが私の解釈、答えである」と語っている。図鑑の絵とは異なり、学芸員の監修があるわけではないので、田中さんの展示の解釈だ。学芸員が解釈した展示の再解釈でありながら、そこにどんな視点が潜んでいるか。これを探してみる行為はなんだか田中さんと対話をしているみたいだ。目の前のモノと作品を見比べながら、同じ視点を探してみたり、

違和感の正体を探してみたり。そういえば、私たちも同僚や他の博物館の展示を見て「これは〇〇さんらしい展示だな」とおもうことがある。こうしたとき、私たちが展示物や解説を通して学芸員と対話しているのだろう。静かに見えても対話が出来ると、そんな対話相手に学芸員だけでなく、田中さんも加わっていただいた、そんな気がしている。田中さんの作品は展示室に飾られていることを意識して、ちょっと声を潜めて語りかけている。

状況に即して、状況と対話する。そうしたあり方自体が現代美術的ななあと、(美術に関しては全くの素人ながら)感じている。科学の文脈から切り離して美術作品のように展示する「ヴンダーカマー」的な展示が北海道立近代美術館などで試みられていたが、これは展示室の文脈に作品をほうり込んでみるというまた違った挑戦なのだともおもう。本来あるべき文脈から切り離して美術として成立させようとしたケ・ブランリ美術館と対比して考えても面白いかもしれない。ちょっとした、しかし実はかなり冒険的な展示なのだと思う。

展示を見て再解釈しながら、友達や家族と語り、楽しむ。これは皆さんにもやってみてほしいことだ。作品があることで、あらためてそれは、「理科」的な話だけである必要はないと感じた。豊かにモノの見方を広げ、多面的に学んでいく中にきっと皆さん自身にとっての面白さが見つかることを期待したい。




17
A



A

マケノクダツク
Magpho, subgenus



「田中秀介展 絵をくぐる大阪市立自然史博物館」

会期：2022年10月25日（火）～12月11日（日）

会場：大阪市立自然史博物館・本館1階 第2展示室

主催：大阪市立自然史博物館

助成：文化庁「ARCS for the future! 2」補助対象事業

執筆：田中秀介

佐久間大輔（大阪市立自然史博物館）

青木加苗（和歌山県立近代美術館）

田中嘉寛〔展示解説〕（大阪市立自然史博物館）

デザイン：三重野龍

会場撮影：菱生田兵吾

印刷：株式会社春日

発行日：2022年11月27日

発行者：大阪市立自然史博物館

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23